

補陀落渡海：南方の浄土を目指して海を渡る

これは補陀落渡海船を復元したものです。補陀洛山寺の住職たちはこのような船で補陀落渡海に臨みました。補陀落渡海は慈悲の仏である観音菩薩が住まう南方の浄土「補陀落」にたどり着くことを祈願して行われた一種の殉教でした。

補陀落渡海は中世から近世にかけて日本各地の沿岸部で試みられましたが、この寺は補陀落への出発の地として特に有名でした。補陀洛山寺の中庭にある石碑には、868 年から 1722 年までの間に行われた 20 回以上の補陀落渡海が列記されています。ただし、最後の数回については僧侶が亡くなってから遺体を船に乗せる形で行われました。

補陀落渡海船

この船の設計で最も目を引く特徴は、密閉された船室です。外側から釘でふさがれた窓も扉もない船室には、わずかな食料と水、灯りの燃料が入れられ、僧侶が死の直前まで経を唱え、観音菩薩に祈りつづけられるようになっていました。

船室は、四十九本の板でつくられた鮮やかな朱塗の柵で囲まれていました。柵には四方に一基ずつ、合わせて四基の鳥居が設置されていました。これは仏教建築というよりは神道の神社を想起させるもので、熊野信仰の習合的な性質を反映しています。また、この船のつくりは修験道の葬送儀礼とも通じる部分があります。行者自身と世の中の両方に大きな功德をもたらそうとしたことにおいて、補陀落渡海は修験道の苦行と近いものと見なされていたのかもしれません。